



テーマ 介護のしごととの道しるべ2



よりよい介護を考え、実践するための映像教材DVD、第2弾!

介護のしごととの道しるべ2 アセスメントを深めるケーススタディ

本作品は、実際のケアの現場を取材・撮影して作った映像教材で、本編(DVD90分)と解説編(解説書+付録DVD)の2つから成ります。ケーススタディの主人公は、自宅での介護が難しくなり、施設に短期間(約1ヵ月半)入所して、在宅復帰を目指すことになった、一人の利用者、近澤さん(83歳)です。本編は、入所から退所までの流れに沿って、様々なケアを試みるスタッフと、近澤さんの変化を通じた記録映像です。解説編は、ケアの中身を掘り下げて学ぶために、本編からシーンをピックアップ、ケアにあたるスタッフたちと話を聞きます。ケアのポイントや現状を探ります。

本編 ケアで利用者の生活が変わる——カメラはその現場を追いかけます

届出書も思ったより早く、看護士も揃って、結局は心算通り、近澤さんが入所して、ケアのプロたちがアセスメント、在宅復帰のための生活課題の解決に取り組みます!

施設のスタッフたちは、どんなケアをするのか?
近澤さんの生活は、どのように変化するか?

解説編 ケアには目的と根拠がある——個々のケアをプロの視点で読み解きます

初めの利用者に 戻すの戻り方とは?	「帰りたい」と 頼む利用者と 話し合いを 上手につなげるには?
日常生活の 得意な行動から 利用者の能力を知るには?	本人の「意思」を引き出す コミュニケーションの 取り方とは?

「介護のしごととの道しるべ2」シリーズ
本村社長が読み、内容をどう理解するかが重要となる中で、改めて
「介護のしごととの道しるべ2」を「1」をベースとする「2」の形で
作り直したという「1」の「各々のためのしるべ」シリーズは、
各々の現場で、それぞれの現場に合わせた活用が
でき、現場の現場からケアの現場に近づけることができています。

「介護のしごととの道しるべ2」アセスメントを深めるケーススタディ
2016年 制作：株式会社新社会 監修：総合ケアセンター サンビレッジ
STAFF 監修：近澤さん 撮影：近澤さん 編集：近澤さん 演出：近澤さん 脚本：近澤さん 演出：近澤さん
制作：近澤さん 制作：近澤さん 制作：近澤さん 制作：近澤さん 制作：近澤さん 制作：近澤さん

映像でアセスメントの 実際に体感する

彼方舎 映像製作・演出 佐藤 斗久枝

この度サンビレッジの介護を題材にした映像教材の第2弾「介護のしごととの道しるべ2」アセスメントを深めるケーススタディ」が完成しました。ケーススタディ」という言葉が示すとおり、今回はひとりの利用者をめぐるケアを追った映像教材です。第2弾ではありますが、実は撮影自体は2008年に行われたもので、記録映画スタイルの「本編」と、学びを深めるための「解説編」を合わせて教材にしました。

2008年当時、私は「プロのケアが利用者の生活を変える」様をサンビレッジで間近に見て、「なぜ、どうして変わるのか?」ということに強い興味を引かれました。「本編」は、施設の利用者スタッフの傍らにそっと入れてもらい、その興味を追求した90分の記録映画です。カメラは、スタッフが生活の中で利用者を「感じ、考えながら」ケアにあたっているまさにその瞬間を捉え、また利用者の表情や動作、そして語る(または語らない)言葉を映します。映像を見ることで、撮影している私自身がそうだったように、利用者に心を寄せ、思わずスタッフと一緒に「観察」や「分析」をしてしまおう、という面白さがあるのではないかと思います。

一方「解説編」は、今やベテランになった当時のスタッフの方々とともに映像を見直し、ケアの細かなポイントを探り、冊子にまとめたものです。ここでの主役はスタッフの方々。具体的なケアシーンを入り口に、彼らの専門性を詳らかにします。

是非たくさんの方々に見て、役立てていただきたいと思います。願っております。

地域で育つ、地域で育てる

サンビレッジ国際医療福祉専門学校 校長 小林 月子

サンビ校には、現在23人の自宅外通学生がいます。出身県は、長野県8人、岐阜県7人、富山県3人、京都府2人、その他となっています。彼らは、医療・福祉の専門家になる勉強をするために、親元を離れてはるばる池田の地で暮らしているのです。学生は、卒業後、日本各地の医療・福祉を支える貴重な人材としてそれぞれの地域に帰っていきます。高齢化の進む日本において、これからの地域を支える「宝物」となって帰っていくわけです。しかし在学中はまだ「宝のタマゴ」であって修行が必要な状態です。このタマゴを本物の宝物にするにはどうすればいいでしょうか？

ここで、地域のチカラをお借りできれば、と思います。学生にとつても地域の方々にとつても双方にとつて意味があり、メリットのある両者の協力の仕組みを作れないものでしょうか？



▲様々な世代との関わりを通して

まず学生の側からの課題を整理しますと、二つあります。一つは、生活技術の基本を習得することです。生活援助職となる学生が身につけた方が良いと思われ基本とは、たとえば、「人と会ったら挨拶をする」「料理・洗濯・掃除ができる」「ゴミ出しをする」といったものから「回覧板を廻す」「人の話をちゃんと聴く」「状況判断ができる」「自分から課題解決に動く」などまで幅が広いです。学生時代に、



▲地域資源(自然環境)を最大に活かして

自分自身の生活のリズムを作り上げることと並んで、人とちゃんと付き合うチカラを身につけることができれば素晴らしいですね。二つには、経済的負荷の軽減です。家賃の負担を軽減できれば無理なく勉強が出来るようになります。

次に地域の状況を見てみますと、池田町には広い家に一人暮らしあるいはご夫婦で暮らしておられる方が少なからずおられます。その方の中で、「これからの社会を支える若者の育成に力を貸そう」「学生を育てる応援団になろう」と思われる方が

いらつしやるかもしれません。自分の家をそのために使つてみようと思われる方がおられたらうれしいですね。いわば「ライフサポーターの住居編」です。

必要なのは双方を結びつける知恵と工夫でしょう。「地域やお年寄りから学びたい」という学生の意欲と「若者を育てあげたい」という住民の懐深い思いが交差するときにチャンスです。池田町が名実ともに「福祉のまち」になるための試金石、かもしれません。その第一歩は、若者と住民が「障がいを持つても尊厳をもって安心して暮らしていける地域を創ろう！」という目標を共有することから始まります。その目標に向かってお互いが協力しあえば池田町は着実に変化していくでしょう。「若者を地域で育てる池田町、若者が地域で育つ池田町」となつていきますね！第二のふるさとになった池田町から、希望に満ちた若者が全国へ続々と巣立っていくのも夢ではありません。

「しんせい語録」の読み解き

自分が変わる、相手が変わる、
社会が変わる

サンビレッジ瑞穂 山口莉紗

作業療法士2年目となるH27年10月にサンビレッジ岐阜での「ごちゃまぜ研修」へ参加しました。3日間の研修は自分の考えに2つの大きな変化をもたらすものでした。

1つ目は、利用者の気持ちをお大切にしたいアセスメント。OT1年目、介護業務に入り、現場の苦労や忙しさを知り、職員のことを考えたアセスメントが中心になっていました。そのため意思伝達の困難な利用者に福祉用具の選定を行う際、はじめに職員へ状態や変化を確認していました。研修でのケース検討を通じて、1人の利用者にとくさんの職種が関わり意見交換する中で、私たちが関わる対象は誰であるのか、もう一度考え直すことができました。研修後は「○○さん、どうですか？」と声をかけ、少しの表情の変化から、思いや苦痛を感じ、第一に利用者視点に置くようになりました。

2つ目は、自分の思いを他者に

発信すること。元々、自分の思いを相手に伝えることが苦手で、相手の思い通りのアセスメント結果になっていました。ケース検討を通じて、1つの問題点でも職種によって見る視点が異なることを学びました。関わる時間帯や場面、状況、価値観の違いなど、多職種の情報を得ること、自分の得た情報を発信すること、そして本人の意向に照らし合わせ支援の方向性を合意することがチームであり、1人の利用者を支えるための専門性であると感じました。

まだまだ「自分が変わる」の段階ですが、少しずつ「相手が変わる・社会が変わる」に繋がる様、利用者の立場に立ち、他職種連携し、それぞれの専門性を信頼したチームアプローチを実践していきたいと思えます。



▲中学校生の職場体験で福祉機器を説明しています



新生グループには日めくりカレンダー「しんせい語録」があります。語録には介護現場で感じたことや学んだことへのヒントが掲載されています。

福祉とは誰もが犠牲にならないこと

(株)新生メディカル 池田営業所

高橋幸子

91歳のAさんは一人暮らしです。ヘルパーが一日複数回訪問して離床や入浴などの支援をしています。最近、ヘルパーの声かけにも動こうとされず、食事でも欠食されることが多くなり心配していました。ある日、Aさんから話があるから来てほしいと呼び出されました。そこには、いつになく硬い表情のAさんの姿がありました。

「息子はとつくに定年過ぎたはずなのに仕事があるからと言って帰ってきてくれん。わしは見捨てられたのだ。目は見にくいし耳も遠くなり、これから先、一体誰の命令に従って生きていったらよいのか教えて欲しい。」と、おっしゃるのです。

食事を摂らなかつたのは、息子さんに対する必死の抵抗だったのか。そして、私たちの声かけは「命令」と受け取られていたのだ。

「Aさん、息子さんは定年過ぎた今でも社会のために働いていま



▲生きる意欲と食欲が戻ったAさん

す。遠く離れているからこそ、いつも気に掛けて私に電話を下さっています。Aさんは、この家の主として家を守る役割があります。出来ない所は、私たちにお任せ下さい。これからも、Aさんの思うように生きて下さっていいのです。」と伝えました。

しばらくして、ゆつくりと立ち上がったAさんは、台所で遅い夕食を食べ始められました。

家族が介護離職することなく社会を支え続けていくことは、私たちの専門性のある支援があつて可能になります。高齢者も家族も、そして働く職員も幸せでありたいです。

vol.14

「サンビレッジの仲間たち」

楽しさ、やりがい、課題、悩みを仲間と共有する

サンビレッジ大垣 神野祐維

私は新生会に入職して5年目に入りました。私はよく、周りの友人や職場の仲間から「いつも、楽しそうに仕事しているね」と言われます。物事をポジティブに捉える性格でもあり「何とかなる。とりあえずやってみよう。やらなければ分からない」と考えています。また、この仕事を、この職場を辞めたいと思ったことは一度もありません。

もちろん、仕事をしていて上手くいかないこと、しんどいこともあり。しかし、同じ業務をするのであれば、楽しみながら仕事をした方が良く考えています。悩む事や、どうしたら良いのか分からなくなる時には職場の仲間と相談します。共通する悩みもあり、話すだけでも心がすっきりします。自分一人で抱え込むことなく、楽しいことも悩んでいることも仲間と共有することがチームにとっても大切だと考えています。

現在は新人のエルダー役となり、自分自身の立ち振る舞いや分かりやすく伝える方法を模索しています。エルダーになったことで専門職として、先輩としての自覚も一層芽生え、自分自身のケアを見つめ直しながら、一緒に考え学んでいます。ここでも私一人が新人を見るのではなく、チーム全体で育成をしていきたいと考えて実践しています。

これからも職場の仲間たちと毎日、ポジティブ思考も忘れずに自分らしく、楽しくこの仕事を続けていきたいと思えます。



利用者の方との語らいも楽しみです

トピックス

第4回 ピアガーデン

サンビレッジほづみ駅前では、7月16日に第4回「ピアガーデン」を開催しました。

利用者家族の方のピアノ演奏を皮切りに夜の帳が下りる頃、マグロの解体ショーが行われ、会場は熱気と笑顔に包まれました。

スタッフと子供たちによるバンド演奏や手話を交えた合唱も披露され、終始和やかな雰囲気でした。今後も、地域の方々、利用者、ご家族、ボランティア等の皆さんの協力を頂きながら、地域に根差した取り組みのひとつとして、の夏の風物詩「ピアガーデン」を続けていきたいと思えます。



サンビレッジ国際医療福祉専門学校

創立20周年

記念式典開催!



卒業生140名以上が母校に集い、懐かしい恩師や旧友と再会しました。笑顔の輪があちらこちらに広がり、写真満載の記念誌やおいしい料理も楽しみました。介護福祉・作業療法・言語聴覚の各学科卒業生からの活動報告もあり、在校生にとっても刺激となる1日でした。

宮路夏祭り

昨年は生憎の雨で中止となりました宮路夏祭りが、今年は天候にも恵まれ盛大に開催する事が出来ました。ご利用者や地域の皆様など多くのご来苑者に、沢山の笑顔を頂戴する事が出来ました。心より感謝申し上げます。来年も更に盛り上げて、皆様のお越しをお待ち致しております。



物故者慰霊祭

サンビレッジ新生苑では、毎年6月に前年度一年間に他界された方々を偲び、物故者慰霊祭を行っています。

今年も慰霊祭には他界者の親族の方々を始め、生前に親しくしてみえた利用者の皆さんが大勢参列され、厳かな雰囲気の中で執り行われました。

